

第85回日本皮膚科学会東部支部 学術大会“The future is here”

(2021年9月18・19日)

※ロイトン札幌とWeb配信のハイブリッド開催

宇原 久

札幌医科大学皮膚科学講座教授

はじめに

札幌医科大学皮膚科としては、これまで第35回(1971年)久木田淳初代教授, 43回(1979年)神村瑞夫教授, 56回(1992年)高橋誠教授, 65回(2001年)神保孝一教授, 76回(2012年)山下利春教授が主催しております。今回は久木田淳教授の第35回から数えてちょうど50年目の開催になりました。ポスターには北海道ゆかりの鳥・フクロウをデザインしました(図1)。招待講演, シンポジウム, 教育講演は, 私自身がいまもっとも話を聞きたい先生方をお願いしました。200名の現地参加を含め950名の方に参加いただきました。



図1 本大会抄録とピンバッジ

「大きな目で本会と自分たち医療者の現在と未来をしっかり見守ってもらいたい」という希望を込め, “森の守り神” などと呼ばれるシマフクロウとエゾフクロウを図案化しました。

招待講演

まず, 招待講演1はカリフォルニア大学サンフラ

ンシスコ校のBoris C. Bastian教授にメラノーマの遺伝子異常の最新情報, とくにメラノサイトからメラノーマ細胞が発生する段階の異常についてご講演いただきました(図2)。メラノーマの遺伝子異常も, 発がんの機序も多彩であることが示されました。招待講演2は, 私が以前からファンだったGarr Reynolds教授(関西外国語大学英語キャリア学部)にプレゼンテーションの極意を伝授いただきました(図3)。シンプルさ(抑制)の重要性を再認識しました。招待講演3は本学の松村博文教授にホモサピエンスの東アジアへの移動についてお話しいただきました(図4)。わくわくする内容でした。

シンポジウム・教育講演

シンポジウムや教育講演は, 薬疹(重症薬疹の診断と治療, 分子標的薬, 減感作・脱感作), 感染症(薬剤耐性, 内服抗菌薬, 重症感染症, トリビア), 食物アレルギー(新ガイドライン, 他科との連携, 検査手順, 魚アレルギー), 母斑(遺伝カウンセリング, 母斑という用語について), 行動経済学と医療, 好中球(基礎, 病理, がん, 炎症性疾患), 在宅診療の実際, メラノーマ(薬剤が効きにくい掌蹠, 粘膜型), クイズ形式で学ぶダーモスコピー(炎症性疾患), 皮膚外科(基礎編)を取り上げました。自分でお願ひしておきながら, リアルに聞けない講演が多くとても残念でしたが, 録画で拝聴し, すべてのテーマが視聴者のためになったと確信できました。感謝の気持ちでいっぱいです。



図2 招待講演1 Bastian 先生

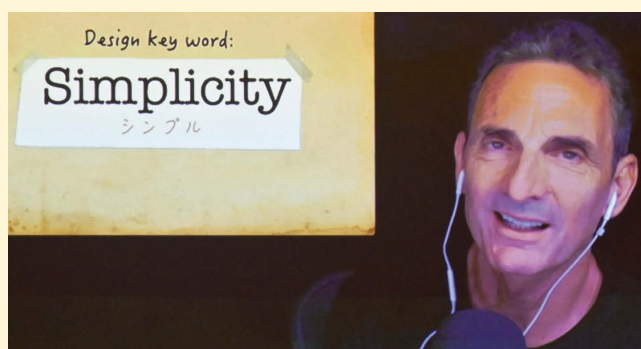


図3 招待講演2 Raynolds 先生



図4 招待講演3 松村博文先生



図5 木村弓さん、ピアニストの中川俊郎さんと大会スタッフほか

スペシャルコンサート

1年半前にコロナが蔓延し始め、それでも1年経てばある程度落ち着くであろうと思っていましたが、状況はさらに悪化してしまいました。そんなことを見越して考えた案ではありませんでしたが、大好きな木村弓さんのコンサートを企画しました。学会直前に札幌にお越しいただけることが決まり、気持ちがだいぶ明るくなりました。歌声と竖琴の音色は心に沁みました。ある先生からPCの前にお子さんを呼んで、一緒に視聴されたとお聞きし、うれしく思いました(図5)。また、札幌医大皮膚科教室員、同門会の先生が中心となって弦楽アンサンブルを披露しました。私もちょっと出ましたが、本学会で一番緊張しました。

おわりに

本学会では、座長、演者の先生方、日本臨床皮膚科医会、札幌皮膚科医会、札幌医大、同門会、たくさんのメーカーの方々から多大なご支援をいただきました。また、学会というものを初めて主催しましたが、自分自身が楽しめたのは、日本皮膚科学会の学会担当の皆様のご支援によります。山田紀子さんとスタッフの方々にお礼申し上げます。心残りがあるとすれば、札幌でおいしい食事とお酒を多くの方と楽しめたかった、という1点のみです。楽しみは遠くないfutureに残しておくことにします。ありがとうございました。



デルマトアンサンブル
演奏会
YouTube